The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	トロントでの転機
Author(s)	ミュラー, スティーブ
Citation	未来共生学. 2016, 3, p. 193-201
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56253
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪から見たトロント

トロントでの転機

スティーブ ミュラー
大阪大学未来戦略機構第五部門特任講師

誰の目にもわかるほど彼女が弱々しげな表情を見せたのは、彼女が立って話している人生体験のせいだった。家族がいい生活を過ごせるように、家族と別れて、どのようにカナダに働きに来たのかを話す彼女の頬を、涙がこぼれ落ちた。10代の息子と別れて幾年もの歳月が過ぎ去っていた。息子を養育できるはずだった時間は、違う人々の息子や娘を育てるために費やされてきた。

彼女は、カナダでの永住を望んで、フィリピンからやって来た介護者である。非効率な役所仕事のせいで希望は断ち切られた。制度の欠陥によって、彼女は奴隷のような境遇に置かれ、フィリピンに残る家族を助けるだけの収入を得られなかった。

2014年夏、未来共生プログラムの履修生たちはカナダの多文化主義政策が「未来共生」の研究にどう関わっているかを学ぶために、彼女の話を聞いた。トロント大学での2週間の夏の研修中に訪れたフィリピン女性センター（Philippine Women Centre）はマグカイセ・センターの地下にあった。「マグカイセ（Magkaisa）」はタガログ語で「統一」という意味である。

カナダ政府の「市民とカナダ移民」局のウェブサイトは、統一という理念を以下のように記している。「カナダの多文化主義は、すべての市民は平等という信念の基礎にある。多文化主義によって、すべての市民は自らのアイデンティティを保ち、祖先への誇りと帰属感

を感じうる。社会へ受け入れられることによって、カナダ人は安心感と自信を持ち、多様な文化への開かれた態度と受容を可能にする。多文化主義が人種やエスニックな調和、そして文化間の理解を促すことを、カナダの経験は示している」[1]。

写真1. トロント大学での履修生プレゼンテーション（2014年度）

2、3日のトロント滞在の後、履修生たちは、いわゆる「文化的多元主義のモデル社会」について、すべての文化が平等な立場と機会を得て共生できる統一的な多文化社会という理想は「空っぽの箱」により近いのではないかと考え始めた。

「カナダの多文化主義」に関する夏の研修は「多様性と不平等への批判的な関わり」という目標の下、2年にわたって行なわれてきた。この目標について、ボニー・マッケルヒニー教授はカナダの多文化主義を紹介する最初の講義において、「異なるやり方が現場で行なわれているのを見れば、問題は実践段階にあり、やり方を改善するだけでいいと考える人がいる。しかし、多文化主義の理念そのものに欠陥があり、カナダの多様性に関する考え方が間違って構築されていると考える人々もいる」と語った。さらに、研修のコーディネーターでもある佐塚志保准教授は、「カナダの多文化主義は、征服者による植民地主義、さらには近年のグローバル資本主義との関連で発展してきた」という広範に受け止められている言説について説明した。

カナダは、世界で最も早く多文化主義を公式の政策に取り入れた国の一つだった。履修生たちが、プログラムで求められる六つのリテラシー（多言語、コミュニケーション、政策、調査、グローバル、フィールドワーク）を習得し、「多文化イノベーター」として、多文化共生に関わる問題に取り組むために、カナダに勝る適地はどこにあるだろうか。

履修生たちはここカナダで、多文化共生を日本で定着させるやり方を確実に学べるはずだ。彼らは、文化が多様なここトロントで、多様性の中の統一のあり方を見聞し、坩堝よりもモザイク、敵意のない共存の実践、平等につながる寛容と受容を自らの目で確実に見ることができるはずだ。しかし、こうした望みは2、3日の滞在で絶たれ、単なる幻想となった。世界を勇気づける灯火のようにこの政策をみなす公的な専門用語によって、望みは見えなくなってしまった。彼らは、いっそのこと、目標未達成のまま日本に戻り、文科省に奨励金を返して、多文化共生は欠陥のある理念だと伝えた方がよかったのかもしれない。

履修生の中には当初、カナダの多文化主義政策への批判の一部は否定的すぎであり、偏執症に近いと疑う者もいた。研修への準備として履修生に渡した文献の一つに、スネラ・トバニ氏は次のように記している。

> 国家への受け入れを望む移民は、自らの文化の否定的な要素を永遠に打ち消し続けるよう求められている。「船を下りた」直後の態度に戻ったり、「移民」特有のアクセントを話したりしないよう、人はいつも注意し、警戒すべきだとされている。白人は、こうした人種的な点から絶えず人々を監視し、ちょっとした言葉や態度に目を光らせており、国民とは何かを「知る」ことは、いつも「彼らはすべて○○のようだ」と分類することだということがわかる[2]。

こうした極端な言い方は、証拠が示されておらず、カナダの多文化主義政策は白人優位の社会を覆い隠し、他の人種の犠牲において白人が特権を得ている、という議論をむしろ弱めるものである。ただ日が経つにつれて、履修生たちは、そうした集団が存在する現実に向き合うこととなり、トロントへの失望感が強まっていった。

2014年における転機はフィリピン女性センターとトロント市カナダ先住民センター（Native Canadian Centre of Toronto）へのフィールドトリップだった。前者において履修生たちは、差別と搾取、虐待

の地獄のような棲み家と言われる「住み込み介護者プログラム」について学んだ。弱い立場にあるフィリピン人女性たちは、永住を約束されてカナダにやって来るが、結局は、豊かな中間層に囲い込まれた労働力になってしまう。

履修生たちは、搾取と嫌がらせと酷使についての体験談を聞いた。住み込み介護者（live-in careworker）は、最低賃金以下の給料で、休日なしの週七日間、長時間にわたって働いた。侮辱や脅かし、性的虐待の対象にさえなった人もいたが、誰も暴力について訴え出なかった。というのも、彼女たちは自分たちに権利はないと思い込まされ、簡単に帰国させられることを恐れたからだ。フィリピン女性センター（PWC）は、政府の支援なしに設立され、フィリピン労働者に支援と情報を提供し、「住み込み」条件を除き、到着時に永住待遇を与えるようロビー活動を行なった。PWC議長のジョイ・シオソン氏は、「我々は商品ではなく、人間なのです」と語った。履修生たちがトロントを離れた2ヵ月後、政府は、プログラムを見直して、永住の必要条件として住み込み要件を除き、2014年11月30日から施行した。クリス・アェクサンダー移民相はトロントでの記者会見で次のように述べた。「全カナダ国民、とりわけ介護者の方々に言いたい。虐待、そして弱者に貶められた時代は過ぎ去った、と」（2014年10月31日）。

政府は同時に、介護者（caregiver）が永住を請求できる二つの種別を設けた。一つは子どもの介護者（child-care provider）、もう一つは医療のための介護者（health-care aides）である。2015年から、年間2750人を上限に種別ごとに応募を受け付け、6ヵ月以内に手続きを進める。しかしこの改革は「介護者運動センター」（Caregiver Action Centre）から、上限の設定によって、それまで永住を保証されてきた住み込み介護者の数が減ってしまったとの批判を受けている。同センターは、2015年8月30日の記者会見で、保守政権による「嘘つきで差別的な移民政策だ」と批判した[3]。

写真2. フィリピン女性センター マグカイセ・センターにて（2014年度）

2015年10月19日の連邦選挙で保守を下したジャスティン・トルドー率いる新たなリベラル政権が、永住制度改革の約束を守るかどうか、その場合、長年、嘘と搾取の犠牲にされてきた住み込み介護者にどのような恩恵があるのかを見極めなければならない。

＊

履修生たちのトロント市カナダ先住民センターへの訪問で痛感させられたのは、征服者の植民地主義によるカナダの歴史は、不幸にも、嘘と搾取に基づいているように思えたことだった。政府は「寄宿学校」として呼ばれるキリスト教学校づくりを後押しし、先住民の子どもたちを白人のヨーロッパ文化に同化させ、「子ども期における先住民性の抹殺」を効果的に進めようとしたことを履修生たちは知った。

2008年6月11日、当時のステファン・ハーパー首相は公式に謝罪し、「寄宿学校の二つの主要目的は、子どもたちから家庭や家族、伝統、文化の影響を取り除いて孤立させて、主流文化に同化させることだった」と述べた。しかし多くの先住民たちは、この謝罪が象徴的な振る舞いにすぎず、寄宿学校の生徒の子どもや孫たちが直面している問題を軽減するための具体策は何もないと感じた。彼らのアイデンティティから、彼らの文化は完璧なまでに消し去られ、カナダの先住民は、カナダ社会のいわゆる多文化モザイクの中に場所を与えられな

写真3. トロント市カナダ先住民センターにて（2015年度）

ければならなかった。文化的抹殺は続き、かつての見える少数者が見えない少数者となってしまった。

2015年の夏の研修で、カナダの寄宿学校のドキュメンタリーを見た沖縄出身の履修生が、カナダの先住民と沖縄人の経験を比較することができた。彼によると、沖縄はそもそも「琉球王国」と呼ばれたが、1879年、日本に併合された。その時以来、沖縄人は日本語を話さねばならず、琉球語は日本の一方言とされた。日本本土の学校で方言を話した生徒がそうだったように、沖縄の学校でも、生徒がもし沖縄語を話せば、方言札を首からかけるという屈辱を受けた。

多くの沖縄人は、「子どもたちから沖縄を抹殺」し、日本人となることを強いる政策だったと言うだろう。この政策は、日本が後の戦争中、戦闘員の数を確保する時になって役立つことがわかった。大田昌秀・元沖縄知事（1990 ～ 1998）は沖縄戦の際、日本人が沖縄住民に行なった虐殺、即ち、降伏しようとしたり、琉球語を話したりした罪で数千の沖縄人が日本軍部隊に殺害された経緯の詳細を書き記している。

＊

アイデンティティと「Home」の問題は、この夏の研修の重要な要素だった。カナダの多文化主義は、アイデンティティを抹殺する手段なのか、人種のモザイクではなく坩堝なのか、あるいは、カナダ独自のアイデンティティを構築する手段なのか、といった問いかけがなされた。カナダ独自のアイデンティティがあるならば、「あなたはどこの出身なのか」という質問は侮辱と受け取られるだろう。移民の子どもはカナダ出身であり、アイデンティティは外国系のハイブリッドではなくカナダ人だと見られたいのだから。

しかし真のカナダ人とは何者なのか。多様性は、白人のカナダ人アイデンティティの犠牲になってきたのだろうか。トリニダード系カナダ人のニール・ビソンダス氏は著書『幻想を売る――カナダ多文化主義という狂信』の中で、むしろ反対に、多文化主義政策は自らの文化にこだわるゲットーの構築を人々に促しているとし、さらに、モザイクの考えは、異国風になるのを後押しし、カナダ人を統一させる同種性より、対立を導く差異に焦点を当てていると批判している。

履修生たちが訪問したガーナ人ペンタコスタ教会には、そういった側面があったようだ。ペンタコスタの信心によって、黒人の信徒たちがガーナの故郷とのつながりを保つだけでなく、同じ信仰者との「精神的な」居場所を世界のどこでも持つことができる。地域を越えるトランスナショナリズムの文化的複雑さを研究するギリッシュ・ダスワーニ教授の指導の下で、履修生たちは、そうした考えを知ったことだろう。教会の牧師は、キリスト教のアイデンティティはガーナ人のアイデンティティより重要だが、同時に、彼はいつかガーナに帰郷する日を楽しみにしていると語った。

「Home」の概念は故郷を離れた人々の意識にいつもあり、多様性を大事にする社会はその帰属化の取り組みを保護しなければならない。問題は、カナダの多文化主義政策が、文化の多様性の外観だけを祝福することによって、そのつながりを弱体化させようとしているかどうかである。征服者の植民地主義に基づき、人々に祖先のルーツから身を遠ざけさせようとするカナダの単一アイデンティティ社会は、目立たないけれど、大々的な文化抹殺によって、もたらされている。

履修生たちはこうしてジレンマに直面した。トロントでの経験から、日本に持ち帰って多文化共生の理解を進める何かを引き出せるだろうか。多文化主義は、多様性の考え方を過って構築するやり方であり、主流である白人ヨーロッパ文化の目隠しである。さらに地

写真4：ガーナ人ペンタコスタ協会にて（2014年度）

域、特に低収入の労働者階級の地域のニーズに応えず、文化の外観を重視し、先住民を排除している。そうした示唆や指摘に彼らは打ちのめされていた。もし多文化主義が、多様性の考え方を過って構築するやり方ならば、未来共生はどうなのだろうか。寛容は単なる他者への「受忍」となり、互いの敬意や受容のない「共生」が結局、ありうるのだ。

2014年、履修生たちは、「未来共生」の概念についての理解を英語であいまいにしか伝えられなかった。さらに、未来について悲観的な展望を持って帰国した。たぶん、「未来共生」の概念は、ばらばらの理想を込めた専門用語が消えては浮かぶ、もう一つの「空っぽの箱」だった。

翌年までに、すべての履修生は、プログラムの「公共サービス・ラーニング」を通じて、より明解に概念を理解するようになった。移民家族の子どもたちが、日本の教育制度でうまくやっていけるように努める大阪市立南小学校で、履修生たちは、日本人でない児童を支援した。大阪の茨木市豊川地域では小規模なコミュニティ開発プロジェクトに取り組んだ。同地域は、低所得層が社会的差別にさらされた長い歴史があり、その影響は貧困水準の中に今も見出すことができる。

写真5：優先地域（キングストン・ゴールウェイとオートン公園一帯）に飾られている壁画

トロントで低所得層が住むキングストン・ゴールウェイやオートン公園一帯、そしてポイント地区や東スカラボロー・フロント地区での貧困層を支援するコミュニティーセンター、さらにトロントで最も有名な多文化地域、ケンジントン・マーケットへの民族学的フィールドワークもさらなる転機となった。経験的な調査を通じて、履修生たちはカナダの多文化主義政策と日本の共生概念との接点をつなげ、相違をより正確に区別できるようになった。さらに、批判は意識しつつも、双方の概念とも、中身のない「空っぽの箱」と言うより、何か取り出せるものがあるのではないかと少し楽観的に考えるようになった。

プログラムの原則である「国籍、民族、言語、宗教のみならず（略）性差や世代間、病、障害歴といった要因との交わり」を見つめることが、多様性についての考えを構築する、より包括的な手立てとなりうるとの新たな確信が生まれている。しかしそれは、理論から抜け出して、カナダの多文化主義政策がはまった落とし穴を避ける実践モデルをつくろうとする場合に限られるのである。

注

1 http://www.cic.gc.ca/english/department.index.asp（2015/11/30アクセス）

2 Thobani, Sunera 2007 “Multiculturalism and the Liberalizing Nation” in *Studies in the Making of Race and Nation in Canada*, p.171. University of Toronto Press.

3 http://caregiversactioncentre.org（2015/11/30アクセス）

（翻訳　脇阪紀行）